

「図画工作科を教えるために」 教科に関する科目における実践【1】

～ 鉛筆削り ～

吉田 貴富

Learning to Instruct Arts and Crafts:

A practice in a course for subject teaching in a teacher training program【1】

～ Sharpening a pencil ～

YOSHIDA Takatomi

(Received August 5, 2013)

キーワード：図画工作、教員養成、小学校、教科指導、教科に関する科目

はじめに

本稿は、小学校免許取得のための「教科に関する科目」の図画工作科に関する授業科目における実践を振り返り考察するものである。

上記に相当する授業科目として筆者は、山口大学における「初等科図画工作」と梅光学院大学（非常勤）における「図画工作」を担当している。

本稿では、2013年度前期の実践の中から、初めて取り入れた内容「鉛筆削り」について述べる。

1. 「鉛筆削り」を構想・実践した契機

1-1 齋正弘の著書

2013年1月、齋正弘（さいまさひろ）著『大きな羊のみつけかた 「使える」美術の話』（メディアデザイン、2011年）に出会ったことが、「鉛筆削り」を授業内容に盛り込むこととした契機であった¹⁾。

齋は宮城県美術館の教育普及部長であり、立体造形作家でもある。宮城教育大学教育学部中学校教員養成課程美術専攻科の卒業である。

目次は以下のとおりである²⁾。原文には数字は振られていないが、わかりやすくするためにローマ数字と算用数字を振る。

まえがき 大きな羊のみつけかた

I. 美術を使おう

1. 保育園児と大学生のための「美術を考える授業」
2. 小学生と中学生のための「美術って、本当のところどうなんですか？」
3. 美大の学生のための「写真機ができて絵を描くことを続けるのはなぜか？」
4. 美術／図工の先生のための「美術／図工教育は何のためにあるのか？」

II. 美術館を使おう

1. 美術としての教育、教育としての美術 宮城県美術館から見た美術教育

2. 学校と美術館の連携のために
3. 表現行為としての鑑賞 本物を見るということは、何を見ることなのか
4. 美術であるということ 障害者美術展に関わって

Ⅲ. 質問に答えて

美術の使い方・実践編

あとがきとして 齋正弘のできかた

1-2 齋正弘の「教科に関する科目」の実践の概要

「I-1. 保育園児と大学生のための『美術を考える授業』」は、齋が「仙台市内のある私立女子大学の保育科で行なった、毎週1回90分15回の、『基礎技能／図画工作』の授業の進め方を再現」したものである³⁾。

その授業科目は、その名称と本文の記述内容から、小学校免許取得のための「教科に関する科目」の図画工作科に関する授業科目であることが窺える。

齋が述べている内容の中には、筆者吉田が日頃から考えていることに近いものが少なくない。たとえば、齋による以下の記述である⁴⁾。

機会があるたびに言っていることだが、今の日本の（大学までを通しての）基礎的な教育を行なう学校のシステムで行なわれている図工と美術の授業は、美術館を始めとする美術の世界で話されている美術の理解とは、何か離れているように感じられる。

筆者吉田は齋のような提案はできないが、問題意識としては非常に近い。

上掲書には、他にも似ている問題意識や共感できる部分はあるが、本稿においては割愛する。

「I-1. 保育園児と大学生のための『美術を考える授業』」に記述されている15回分の内容を、齋が、明朝体の本文に対して、ゴシックで掲げている各回の授業題目と「課題」と「準備」と「作業」を抜粋して以下に掲げる⁵⁾。ここでは、齋の実践の全体像を詳しく伝えることはしない。

1 時限目 ナイフを買ってくる。

課題「各自、何とかして次の授業には、ナイフを1本持って来なさい。」

2 時限目 ナイフで、何かを削る。

課題「落ちている枝を5本拾い、それをかっこよく、土に並べて刺して立てろ。」

課題「この枝で、小さい板を作って、提出する。」

準備「次の時間は、好きな鉛筆を1本と、ナイフを持ってくること。」

3 時限目 ナイフで、鉛筆を削る

課題1「その鉛筆の芯だけを、提出しなさい。」

課題2「芯を提出するときは、『ウエルカム、芯さん!』という状態で提出すること。」

準備「次の授業から、上手い絵の描き方練習を始める。絵、描くっていったら、鉛筆と紙だから、各自好きな鉛筆（芯が出ているもの）を1本持ってくる。今度は折らないので、ちゃんと好きな鉛筆を持ってきて大丈夫だよ。紙は、こっちで用意する。」

4 時限目 上手い絵の描き方1／塗りつぶし

課題「では、その円の周りも、全て、塗りつぶしなさい。」

準備「次授業で、マッキー（フェルトペン）細書きを使う。できたら6本セットがあるといいな。ない人は、黒と、その他1色以上持ってこられるだけ色マッキー持ってきなさい。」

- 5時限目 上手い絵の描き方2／写し絵基礎
課題「透けて見える物を、マッキーで写しなさい。」
準備「次の時間も写し絵の続きをするので、今日使ったマッキーセットを持って来る。」
- 6時限目 上手い絵の描き方3／写し絵展開
課題1「前回と同様、下の絵を写しなさい。」
課題2「写しとっているトレーシングペーパーを30度傾け、写し続けなさい。」
課題3「写し絵は、塗りつぶしの時と同様、彩色して提出。」
- 7時限目 美術探検
- 8時限目 美術館探検
- 9時限目 創作折り紙
課題「松ぼっくりを折り紙で作れ。紙は折るだけ。切ったり貼ったりしないこと。」
準備「今回は、カレーライス用スプーンと、マッチを持って来る。」
- 10時限目 小さい焚き火1
本来の課題「小さい焚き火を作り、短時間維持する。」
課題1「地面に、自分がすっぽり入れる広さの、浅い穴を掘れ。」
課題1＋「後で来た人が気付かない程度に元通りに埋め戻せ。」
準備「今日持ってきた道具はそのままこの次も使う。」
- 11時限目 小さい焚き火2
課題「さてそれでは、その穴の中に、火を起こせ。」
課題1＋「火が点いた人は、今燃えている枝を燃やし尽くしてから手で押さえ、良く揉み消してから、元通りに土をかぶせて終了。前回同様、後で誰かが見ても気付かれなないように戻すこと。」
準備「各自、壊してもいい古新聞紙を3日分を持って来ること。」
- 12時限目 ハムスターになる練習
準備「次も、各自3日分の古新聞紙と、セロハンテープを1巻きを持って来ること。」
- 13時限目 UVシェルター
課題「さっきわかったことも使って、各自、自分用のUVシェルターを作れ。」
準備「次回は脳みそだけを使う。朝ご飯をちゃんと食べてくるように。」
- 14時限目 神経探検1
作業「息合わせ」
作業「糸引き1」
作業2「糸引き2。同じ作業を、今度は、目をつぶってしなさい。」
作業3「糸引き3」
作業4「糸引き4」
準備「本当は続けてしたいのだけれど、脳が緊張しすぎたので今日は終了。次も続き。朝ご飯をちゃんと食べてくるように。」
- 15時限目 神経探検2
課題1「下だけを見ながら、階段を下まで行ってみる。」

課題2「天井だけを見ながら、空が見えるところまで行ってみる。」

課題3「芝生が終わるところ、又は、何かにぶつかるところまで、まっすぐ歩け。」

1-3 齋正弘の鉛筆削りの実践

齋は、2時限目において、次のように投げかける⁶⁾。

「さて、ナイフ持ってんだから、何か削ってみるかな。削る物持ってるか？」

(中略)何か、誰でも気兼ねなく削ることのできる、木のかげらのような物はないだろうか。考え、移動し、探して、見る。私の実践では、キャンパス敷地内のはずれ(普段は誰も通らない建物の裏側)に、昔からある松の小さな林が残っていた。皆でそこに行ってみる。入学以来、初めてそこに来たという人も多数いた。松の枯れた枝が、たくさん落ちている。

課題「落ちている枝を5本拾い、それをかっこよく、土に並べて刺して立てろ。」

(中略)

課題「この枝で、小さい板を作って、提出する。」

これが、齋の授業において「ナイフで削る」最初の活動となる。

この経験を生かして鉛筆を削らせるのである。

2時限目の終わりに「次の時間は、好きな鉛筆を1本と、ナイフを持ってくると」と準備物の指示をするので、学生はそれらを持って3時限目に臨むことになる。

3時限目は以下のように始まる⁷⁾。

木を削る作業は各自だいぶ上手になってきたことを確認した上で、今日は鉛筆を削る。好きな鉛筆を出して、手で、二つに折る。二つ確認。一つ、鉛筆は、手だけで簡単に折れ/折ることができる。二つ、好きな物を折る(意識的に壊す)と、こういう感じになる。私を恨んでもいいから、忘れないように。鉛筆で良かったね。

課題1「その鉛筆の芯だけを、提出しなさい」

その鉛筆は、あなたが決めた、「私の大好きな鉛筆」だった。だから、丁寧に芯を出し、丁寧に提出することが本当だ。だから、

課題2「芯を提出するときは、『ウエルカム、芯さん!』という状態で提出すること。」

芯だけってどういうことですか?ウエルカムってどういうことですか?という声上がる。鉛筆の木の部分を全部削って、芯だけにしてそれを提出。(以下略)

2. 実践

2-1 「鉛筆削り」を取り入れた理由

筆者吉田は、齋の15回の実践を読み、想像して、大変刺激を受けて、様々なことを考えさせられた。自己の実践に生かせないかとも考えた。その結果、当面、この「鉛筆の芯だけを、提出しなさい」という部分だけを、自分なりにアレンジして取り入れることにした。理由は、主に以下のとおりである。

まずは、以前から鉛筆削りを学生に体験させる必要があると考えていたこと。鉛筆削り機が普及している今日、刃物で鉛筆を削ることは、美術や造形を専門とする学生と造形文化に携わる専門家にしか必要のないもののように見えるかもしれないが、実際には、鉛筆削りで培われる技能は、竹ひごや角材などを削る際に用いる技能であるし、竹トンボなどを制作する際にも用いる技能である。図画工作科において工作を実践するならば、教師が児童に刃物で削ることをやって見せ、やり方を教えなければならない場面が必ず出てくる。いわば、図画工作科を指導する上で教師にとって必須の技能のひとつなのである。

齋実践の中から結局鉛筆削りだけを取り入れた理由はふたつある。まず、時間的な制約と吉田実践全体のバランスの問題である。山口大学「初等科図画工作」においては、吉田は6回を担当し、主に平面的な造形活動と造形遊び的な活動を内容としている。梅光学院大学「図画工作」においては、15回を担当するが、他の教員が他の造形的な授業科目において立体的な内容を主に扱っているため、「図画工作」においては山口

大学「初等科図画工作」同様に平面的な造形活動と造形遊び的な活動を主な内容としているのである。既に内容を厳選して構成している授業を大きくは変更し難い。

もうひとつは、授業者の教育理念の違いである。齋実践はダイナミックであり、造形活動を根源的に問い、問わせ、体験させている。しかし、それはあくまでも齋の芸術観、教育観に基づいた実践である。慎重に検討した結果、2013年度が始まる段階において吉田が自己の実践に取り入れられると判断したのは「鉛筆削り」だけであった（梅光学院大学「図画工作」においては、「鉛筆削り」に続いて、齋とは異なるドローイングの活動を入れてみたのだが、今回は割愛する）。

2-2 齋実践との差異

齋の理念と実践には共感できる部分が多いが、筆者吉田は齋実践の「好きな鉛筆を持参させて、折らせる」ことには賛同しかねる。

齋はそのねらいを次のように述べる⁸⁾。

学校の授業は、強制的に集められた集団が、強制的に科せられた課題を、強制された枠の中で、その人の意思とはほとんど関係なく作業することを通して、その集団が生き延びるために必要な体験を積む練習だ、と言えないだろうか。それをすることによって、何をこの人たちに伝えたいのか、を強く持つことが、指導する側に求められ、その上での、作業が行われる。作業をする側の人に、どのレベルまで、何を強いるか。大好きな鉛筆を強制されて折る。それによって起こる体験をどの方向に経験化するか。クリアでシンプルな目標に裏付けされた強い意志が、指導する側に求められる。

この記述内容には賛同できる。筆者吉田も、「指導法に関する科目」の中で、同様の内容を講じる。教師を目指す学生の多くは、学校の中で上手に諸課題をこなし、良い評価を受け、「いい思い」をしてきた者である。だからこそ教職を志したとも言えるが、その分、学校というものの自体や学校文化を疑わないし批判しない。教師と児童・生徒・学生との関係は基本的には権力関係であるのに、そのことに気付かない。気付いていたとしても、直視することなく権力を持つ側を目指す。そこで筆者吉田は、授業において、脱学校論までは行かないが、学校というものを相対化し批判的に見る必要性を考えさせるようにしてきた⁹⁾。

しかし、上記のようなことを教えるために学生に「好きな鉛筆を持って来させて、折らせる」ことが必要か、と自問すれば、筆者吉田は首肯できない。齋や筆者吉田が教えたいと思っている学校の権力性や強制性は、学生に「好きな鉛筆を持って来させて、折らせ」なくても可能である。いわば「話せばわかる」ことである。学生にとって大切な鉛筆を折らせることに、筆者吉田は大きな抵抗を感じる¹⁰⁾。

齋の授業の受講生は、好きな鉛筆を折ることに大きな抵抗を感じなかったのだろうか。そして、全員が齋の言うがままに好きな鉛筆を折ったのだろうか。もしも筆者吉田が学生だったなら、その指示には従わないだろう、とも思う。「自分がされていやなことは、他者に対してもしない」、これは教育活動の中で、学校の権力や強制性を教える以上に大事なことではないか。

2-3 「鉛筆削り」実践

2013年4月30日に梅光学院大学にて、同年5月17日に山口大学にて、実践した。

授業で用いたスライドを右に掲げる。

前時までに「鉛筆を削ります。鉛筆を削るための、カッター、ナイフ、肥後守などを各自持参すること」と伝えてある。

①まずは、各自、自分用の「削りかす入れ」を廃プリントを用いて折り紙で作る。

折り方を知っている学生は少数である。

折り方を知らない学生にすぐに折り方を教えることはせず、教師があらかじめ折ってから展開しておいた紙を見せて考えさせる。

その後、学生同士の教え合いと教師による指導を始める。

えんぴつを削ろう

- 普通に文字が書けるように
- 線で絵が描けるように

②新品の鉛筆（HB）を「普通に文字が書けるように、線で絵が描けるように」削る。

初めはそれ以上のことは言わないで、個別に全員の活動を見て回った後に、「カッターの持ち方」と「鉛筆を削る際のこつ」を教える。「こつ」は以下の3点である。

- ・角（尾根）に刃を当てる
- ・親指で刃を押して、鉛筆を引く
- ・削りかすが長く出るように

「現代っ子は鉛筆が削れない」と言われるようになって久しいが、実践してみると、予想していたよりもうまく削れた。ほとんどの学生がまずまずの出来だ。現代の大学生の実態は、筆者吉田が四半世紀前に中学生を対象として鉛筆画を指導した際の実態と変わらない¹¹⁾。

③全員がおよそ削れたところで、「芯をできるだけ長く削り出しなさい」と次の課題を提示する。「できるだけ芯を折らない」と付け加える。

評価の基準を示す。ここで、授業者があらかじめ削っておいた見本兼基準となる鉛筆を提示する（右写真）。

評価の基準は以下の通り。

- ・見本を超えたら合格5点
- ・折れたら－1点
- ・不合格0点

芯の形状や美しさは評価の対象外である。見本兼基準の鉛筆はほぼ芯がそのまま表れた、つまり軸がきれいに削ぎ落されているほぼ円柱状のきれいな形状であるが、学生が取り組む場合には、芯が凸凹であっても構わない。折れなければよいのである。

見本兼基準の鉛筆の残った軸の部分は、もっと短く削ろうと思えば可能なのだが、軸を意図的に限界よりも長めに残してある。軸が短くなると鉛筆が持ちにくくなり、削りにくい。怪我をする可能性が高まると判断したからである。（齋実践に倣って鉛筆を折らせると、鉛筆が短くなってしまおうとデメリットも生じる）

ところが、梅光学院大学で実践してみると、合格した後でも削り続け、とうとう軸を全て削り取った学生が現れたのである。即興で「芯をすべて削り出したら＋1点で6点」とした。

6点を獲得した学生は、梅光学院大学が26名中13名、山口大学が63名中18名であった。

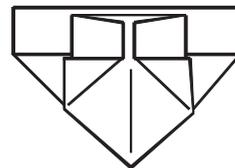
芯を折ってしまった学生はいずれのクラスも1割程度であった。

削り方は様々である。先端から少しずつ削り出していく者もいれば、削り出そうとする軸の部分すべてを一気に長く削っていく者もいる。この点に関しては何も言わないでおいた。この点こそ各自が思考し工夫するポイントだからである。

「芯を長く削り出すこと」「芯を折らないこと」そして、時間設定は授業終了までの約1時間をこの活動に充てたので時間は十分にあったはずだが、学生の多くは「いかに早く終わるか」つまりより効率的な方法を考えるので、これら3つの条件と自己の技能や巧緻性を総合的に考慮して各自が自分の方策を決定するのである。

まずは・・・

- ・お手元の廃プリントを用いて
- ・「削りかす入れ」にする箱を折り紙でつくろう



こつ・コツ・骨

- ・角（尾根）に刃を当てる
- ・親指で刃を押して、鉛筆を引く
- ・削りかすが長く出るように

芯をできるだけ長く 削り出しなさい

- ・できるだけ芯を折らない
- ・吉田を超えろ
- ・超えたら合格5点
- ・折れたら－1点
- ・不合格 0点



3. 考察

学生は皆楽しみながら取り組んだ。

日常にはほとんどない「鉛筆を刃物で削る」という活動。ほとんどの学生にとって、鉛筆削りという活動そのものが新鮮なものである。

加えて、鉛筆を削るとは言え、芯をほぼすべて削り出すということなど、まずほとんどの学生にとっては未経験であり、初めて見聞きする活動であり、まったく非日常的な活動である。このことが学生の興味を引き意欲を喚起したと言える。

目標と評価基準が明確であることも取り組みやすかったことの一因であろう。学生は、削った鉛筆を教卓に持ってきて基準の鉛筆と並べてみれば、合格か否かは一目瞭然。明快である。

この活動の中で学生は「刃物で木を削る」という動作を数多く体験する。芯を折らないためには繊細な力加減も必要だ。したがって、この課題だけでも「刃物で木を削る」ことが、嫌でも上手になる。

実際に、鉛筆削りを非常に苦手としている学生がいたが、彼はこの活動によって鉛筆削りが上達し、合格をもらった後、笑顔で「僕はもう鉛筆削りは大丈夫です」と言って教室を後にした。

2014年度以降も「教科に関する科目」の内容のひとつとして実践していきたい。

この課題は、小学生・中学生・高校生を対象として実践することも可能であり、適している。学生が将来教壇に立った際に、この経験を思い出して実践してくれれば望外の喜びである。

註

- 1) 齋の著書を紹介して下さったのは山口県立美術館の前田淳子学芸員である。山口県内の教員と学芸員によるグループ・メールにおける2013年1月19日付メールで紹介がなされた。
- 2) 齋正弘『大きな羊のみつけかた 「使える」美術の話』メディアデザイン、2011年、pp. 4～5
- 3) 上掲、p. 16
- 4) 同上
- 5) 上掲、pp. 18～60
- 6) 上掲、pp. 22～24
- 7) 上掲、pp. 27～28
- 8) 上掲、pp. 28～29
- 9) 吉田貴富「近代学校システムへの疑義・警鐘」、若元澄男編著『重要用語300の基礎知識 9巻 図画工作・美術科重要用語300の基礎知識』明治図書、2000年
- 10) 代案として、「好きな鉛筆」を持って来させるとしても、「好きな鉛筆を出して、手で、二つに折りなさい」と指示・命令した後に、数秒間様子を見て、すぐに撤回する、という方法も考えられる。好きな鉛筆を折らせないのである。学生に、その数秒間の気持ちを振り返らせて、学校というもの、授業というもの、教師と児童・生徒・学生との関係について考えさせれば十分であろう。こうすれば、学生にとって大切な鉛筆を折らせることなく、目的は同様に達成される。
- 11) 吉田貴富「鉛筆による基礎デッサン」「合成による空想の世界」、東山明編『中学校・高校美術科ヒット教材集 1 平面造形編』明治図書、1994年
吉田貴富「手のデッサンから共同制作へ」、東山明編『中学校・高校美術科ヒット教材集 2 立体造形編』明治図書、1994年